



ワルプルギスの淫夢

2



登場人物紹介

Characters



ユリーシャ

本名、イリス・フラジュロヌ。
悪徳にまみれた司祭たちと闘
う魔女。悪徳司祭グストーに
囚われ、魔女の烙印を押され
た過去を持つ。



マリーアンジェラ

厳格な教会で生まれ育ったシスタ
ーの娘。魔女狩りに反対したこと
で囚われる。



グロリア

パリ自警団の傭兵。宗教には縁がなく、信仰心もない勝ち気な女性。

メリル

異教の神を信奉する咎でグストーに囚われた、旅芸人の幼い娘。片言で喋る。



エリザ

グストーの下僕に墮ちた魔女。彼の手足となり、ユリーシャの調教に協力した。

アンリエット・ダンゲルテル

一見、幼い姿の貴族の娘だが、実際は齢二百五十を越える魔女で、ユリーシャの師匠。

ルイズ・ラヴリエル

ユリーシャによりグストーの魔手から救われた娘。魔女見習いとして、彼女に懐く。

グストー

かつてユリーシャを拷問・調教した悪徳司祭。私欲による魔女狩りの悪事を暴かれ、現在は獄中にある。

ラウル・フラジュロヌ

ユリーシャの生き別れた兄で、王室直属の若い騎士。

STORY

魔女狩りと称して無垢な娘を弄ぶ司祭、グストー。少女がその毒牙にかかる時、漆黒の魔女が降臨する。高飛車に微笑む彼女の名は、ユリーシャ。傲慢な教会と闘う魔女である。だが、エリザの裏切りで、彼女は復讐に燃えるグストーに囚われ、淫らな拷問にかけられることに。さらに魔女裁判の場に連れ出されたユリーシャは、判事として活躍する生き別

れの兄、ラウルと再会するが、その眼前で痴態を曝させられてしまうのだった。グストーの執拗な調教により、彼の「絶対愛」に溺れ、淫らな魔女として烙印を押されるユリーシャ。しかし彼女が奴隷に墮ちる寸前、グストーの企みを暴いた師匠のアンリエットにより、ユリーシャは助け出され、兄へ自分の正体を告白するのだった。

プロローグ	007	
第一章	ワルブルギスの夜	018
第二章	最初の淫夢	031
第三章	安らぎと対の終	062
第四章	変容する淑女	112
第五章	エンドレス・ナイトメア	150
第六章	淫夢の終わるとき	194
エピローグ		250

「おい今日はこのあと俺がマンコもらうぞ。前はあんまりいい声で鳴くから、我慢できずに髪でコいてて出しちまったんだから」

「じゃ俺はマリーアンジェラをもらおうかな。ひひっ、おっとりした嬢ちゃんなくせに、乳も尻もムチムチさせやがって。たまんねーぜ」

絡みあうのがこの施設でもっとも人気のある二人なのだから当然だった。

国中から集めた美女美少女の中でも、ひとときわ異彩を放つ外貌。どれだけ汚されようと高貴さを損なわず、夜闇に凜と咲く月明かりのような輝きを持つユリーシャ。聖職衣の下に男なら誰でも組み敷きたくなるような抜群のスタイルを隠す、どんな状況でも他者への慈しみを忘れない春の木漏れ日のような暖かさを持つマリーアンジェラ。

「ほらユリーシャ。皆様が褒めてくださっていますわよ」

クスクスと愉快そうに、エリザが見下ろしてくる。

少女はぎりと奥歯を噛んで、肩を睨んだ。そんな態度が相手を喜ばせるだけというのはいやというほど学んでいるが、やめられるほど素直な性格ではない。

ただ……。

「っ、うんっ。あふ、うんっ。ユリーシャさん、ごめんなさいユリーシャさん」

「ひあ——！ うああっ、だめよマリー……っ、耐えて、耐えるの……あああっ」

睨んでいられる時間は日に日に短くなっていった。傲慢さとプライドでできているような魔女だが、日を追うに連れその肉体は、反発もできないほど奴隷生活に馴染みつつある。

「ごめんなさい、ごめんなさい……。でも、でもわたくし、もう……」

詫びの言葉とは裏腹に、シスターは犬這いの身体を浅ましくクネらせ始めていた。

肉交が始まり一時間が経過して、普段のすました顔つきは、もう真っ赤になっている。我慢の堰が切れてしまったようだった。一度肉欲をむさぼるともう止まらず、表情が陶醉に染まるのに比例して、まるい尻たぶの揺れ幅が大きくなっていく。

ここまで耐えたのだ。彼女を責めるつもりはないが……。

(あつ、あつ、だめえ、先つちよが、先つちよが奥で暴れて、子宮を擦って……)

付き合わされるほうはたまらない。聖女の豊満な肢体が右へ左へよじれるのにあわせて、魔女の肉には、反対方向へ淫猥なピストンが課せられた。

石の床に爪を立ててこらえようとするユリーシャ。だが前戯のときから必死で快楽を抑え込み、気丈にもまだ一度も絶頂していない肉道をネチャネチャ擦られては。

「ああつ、う……くつ。……はああん」

自然と女っぽい肩先が右と左でうねっていた。腰を淫らに振りたくりたい衝動を、必死で噛み殺すように。

「ヒハハハ、やつぱりマリーアンジェラが先に落ちたぜえ」

「相変わらずユリーシャはお高く留まってやがるな。ま、だからこそあとでヒイヒイ言わせる楽しみがあるんだがよ」

賭けでもしていたのか。見守る男らが歓声をあげる。

エリザに止められているのか手は出してこないが、興奮は最高潮だった。中には乱れあう娘たちを前に、自制できず自ら手でしごき始めている者までいる。

それほどに乙女たちの饗宴は悩ましく、男らの劣情を煽り立てた。

形のよいユリーシャのヒップと、ひらひらスカートを引っかけた肉厚で重たげなマリールアンジェラのヒップが、ぶつかり、重なり、つぶれている。先ほどまで遠慮がちにくっついていただけなのに、いまではムチムチと肉擦れの音がするくらい激しく。

お互い中心部を守るべくつけられた肛門輪が立てる、カツカツと無機質な音に。男だつたらなにも感じないわけがない。

「んふ、うふん、ユリーシャさん……、ねえ、ユリーシャさん」

「お願いよマリール……、そんなに、つ……あああつ、激しく、激しくしないでえっ」

半分半分で分け合ったものを、少しでも多く呑み込みたがって、官能味たつぷりの臀丘をゆすり、後ろへ突き出してくるマリールアンジェラ。

自然とぐりぐり肉穴が圧迫され、魔女はうろたえた。すでにお尻だけでなく、お互いの性器までがびたびたこすれあっている。

まろやかな柔粘膜は、一瞬の接触でもまるで溶け合うように癒着して、ゾツとするほど妖しい気分を催させた。女友達のペニスで犯されていると思うと、貫かれた肉ひだからは、男にされるものとはちがう優しい恍惚感が生じてくる。

(いやよ……。マリールで、マリールで、いやらしい気持ちになっちゃうわあ)

いつの間にか魔女も、ぼんやりした顔でその削いだように細い腹部から下を、くいつ、くいつと揺らし始めていた。

「ユリーシャも感じてきたみてーだな」

「ああ。高飛車なくせに相当なドスケベだからなあ。感じてくるとすぐに分かるぜ、声も態度もこびこびしてよ」

下劣な嘲笑が聞こえる。けれど、身体の深い部分から聞こえるじゅつ、にゅちゅつと淫らな肉擦れ音のほうが大切な気がして、止めることができなかつた。

（奥……、身体の奥がかき回される。どうにかなつちやうわあ……）

「ユリーシャさん……っ、ねえ、すごい、すごいんです」

いつしか、くいくいと腰を交互に揺らして、極太シャフトを送りつけあうようになる二人。ユリーシャの形のよい美乳と、マリーの見事な容積を誇る巨乳とが、そういうルールでも作つたよう交互に規則正しく右、左する。

「ふふふ、魔女とシスター。正反対なのに似た者同士ですわねえ」

目を細めながらエリザが、ユリーシャの隣に膝をつく。垂れた銀色の髪をかきあげた。小さくまとめたポニーテールは、ちょうど少女の華奢な背骨の上を流れる。毛先は尻肉の谷間へ。ちょうど同じく流れてきたシスターのブロンドの毛先と混じりあっていた。

絡みあう銀と金の中間部を覗き込み、マリーアンジェラのお尻にかかったスカートをめくる。美少女二人が放ち、混ざらせ、ムチムチ肉をぶつけて醸した淫臭が、むわりとあたま



りに漂った。

かちかちぶつかるリングの中央では、どちらも充血しきった肛肉が、ぶつくり膨れてフジツボのように盛りあがっている。いやらしいニオイがするはずである。

「見るよ、もうどっちも、ちよつとでも深くチンポが欲しいからって相手の尻を押しつけようとしてるぜ」

「すげー、ケツの穴見るよ。リングより盛りあがって、いまにもキスしそうだけ」

「どっちも真性のチンポ好きだな。ほら、口元が涎だらけだ。擬似チンポだけじゃ足りないから、フェラしたくてたまんねーんだらうよ」

男らの野卑な罵りに、

「……はぁあ……♡」

被虐の陶酔を覚えてしまうタイミングも同じ。

「あっ、あぁ……っ。だめ、マリー、もうわたし……いつ」

感度まで同じなぶん、前戯をたっぷり受けたユリーシャのほうが、限界に至るのは早かった。ガクガクツと肩を揺らして絶頂に入る少女。めり込んだ凶器に周囲のひだひだが複雑に絡み、固定された。相方に返る衝撃が強くなり、自然とマリーを道連れにして、四肢がたまらない感じでよじれる。

「あアん、はあん。ねえ、もうだめですっ。わたくし、わたくし」

「んふっ、ふっ、うう、私も……ああごめんなさいマリー。私もよお……っ」

悩ましく眉をきゅつと寄せ、美貌をともし艶かしく火照らせた少女二人。ほぼ同時に肩越しの相手を見て、なにごとかと確かめあうと、どちらも張りのある乳房をぶるんぶるん跳ねさせた。

腰の使いがどちらもオルガスムスへ向かうそれに切り替わったのだ。犬這いの肢体が二つ、クネクネと競う感じでゆすれる。

「マリー、ねえマリー。わたしもう、もう……っ」

「わ、わたくしもです。うふん、イッチャウ、ユリーシャさん、イッチャいますう」

身体でもっとも感じやすい神経には、硬い木細工の向こう側に絡む、相手の蜜肉の波状的な振動までが伝わる気がする。ヒクヒクと性器を激しく反応させながら、巨大な王冠部をぐりぐり子宮口へ擦らせる二人。

もつと深く律動を味わいたい。相手を気持ちよくしてあげたい。そんな気持ちまで芽生えつつあった。ディルドーを介した友情は、互いを恋人のように想う興奮へと転化し、淫らなエクスタシーへの制御を奪っていく。

「あ……っ、ああっ、あああああっ♡」

「んく……んふっ、……ううううっ♡」

どちらも美臀をつきあげるようにして、同時のオルガスムスに突入した。

むちむちつと尻たぶがつぶれあい、淑女の裏輪が音を立てる。秘められた肛門まで盛りあがってキスを交わし、そして。

「ひゃあああんっ♡」

自分でしたことなのに、あられない悲鳴をあげてしまった。

格別敏感な後孔に触れたのだった。光沢のある牛皮の生地をまるやかな臀肉に食い込ませ、谷間へと指を押し込む。そのすさまじい反動に、ユリーシャは全身を悶え狂わせた。むちむちつと床で乳房がつぶれ、きれいな丸みが卑猥に歪む。

本来そこをふさいでおくための肉皺は、いともあっさりほぐれ、異物を迎えにいくような反応を示す。

「ふああ……♡ お尻、お尻い……♡」

ツリがちな目じりを幸せそうに溶かして、少女は中指に力を込めた。括約筋はレザー素材ごと受け止め、激しく脈を帯びながら食いついていく。

腔地では奥のほうがヌルリと反応して、指につぶつぶした粘膜が巻きついた。妖しい気分に通かれるままもう一本、人差し指も挿入してみる。指四本ぶんよりよっぽど太い巨根に慣れたそこは、問題なく受け入れた。

「んん？ ユリーシャよ、ソレは脱がんのか？」

革素材ごと腸肉をいじくる少女に、司祭が不思議そうにする。

ユリーシャは自分のしたことにハッととなり、しばし恥ずかしそうに口をつぐんだ。だがニチャニチャ体内をひっかく指に、自己暗示にかかって、

「い、いいん……です」

とろおんと甘えた顔で、いらぬことまで白状してしまう。

「いつも、こうしてるの……♡」

絶対に胸に秘めておくべきことまで、自分から彼に打ち明けて、その羞恥でさらなる被虐の陶酔に陥る。

エリザの『卵』に入れられた数日後からである。ユリーシャにその癖がついたのは。排泄にしろアナルセックスにしろ、後ろの孔を広げたあとは、グストーのペニスに貫かれたくて仕方なくなる。けれど彼は毎日はいないから……夜、自分でいじってしまう。

最初のうちは指で満足していたが、「誰かに触らりたい」という欲求は、獣の皮をかぶせておくほうが満たされた。あの日からこの尻肉に課せられるすべてのことは、彼に貰ってもらう代用品なのだから。

「ぐふふ、これはいい。調教の荒淫のあとで自慰まで欠かさぬとは。たいした淫乱だ」

「あああ♡ い、言わないでえ、んんっ、んふう♡」

「もう昇ってしまうのか？ よかろう、見ていてやるから、そのいやらしい尻を好きなように振って気をやるがよい」

「ふく、あう……アアアン。ちがう、ちがうのお」

最後の理性でなんとか抗おうとするのだが、いつもでさえたちまち昇りつめてしまうのだ。男の視線にあてられながらでは、快感は何倍もの速度で膨れ上がっていく。

「んんっ、むふう、んくううん。……ああイク、いくっ、イク——」

悔しいことに言われた通り、ことさらいやらしくツンツ、ツンツと小尻を後ろへ突き出すように振りたくりながら、弾力のある蜜粘膜を二本の指で交互にひっかけ、腸腔を押し揉む。

くびれた腰部のうねり方は、男に見せていることを意識してか、いつもより派手なものだった。レザーが吸いきれず太ももへ垂れてきた蜜がぼたぼたと振り散っている。

そうしてしきりに男を見上げては、その醜い顔が満足げに緩んでいるのを見て、まるで初めて上手に立つちのできた幼児のように笑うのだ。

(ああ……、もつと見てえ……つ)

トロけた肉弁を深々と射貫き、奥のとくに感じやすいヒダをひっかくことも。孔の形をしたスイッチのように、触るだけで絶頂へと転落を始めてしまう尻穴をほじくることも。どちらもただのサポートだった。

言われた通り自慰で身体を高めたけれど、結局最後は、

「イクウウウウ……っ……っ……っ！」

男の視線によってエクスタシーを迎える。美乳をにゆくにゆく歪ませながら、這いつくばった肢体を打ち振るうユリーシャ。

指二本の太さに広がった秘孔が限界まで収縮する。いりくんだヒダの層が、急激に内部を狭めたため、蓄えられた蜜がびゆるりと音を立てて噴き出した。それらはレザー生地にぶつかり、トロトロと妖しく内太ももを濡らしていく。

くびれた腰を右へ左へきしみそうなくらい折れ曲げている絶頂姿は、凄淫そのもので、とてもマスターベーションで昇りつめたそれではなかった。

他者に連れて行かれたのを如実に物語っている。

「フフフ、なかなかだ」

最後まで悠然と眺め続けていたグストーが、グラスのワインを飲み干した。

★

★

「ンふう……♡」

この作業を嬉しいどころか、光栄にすら思うようになったのはいつからだろう。

少なくともあの幼くされた日。あのころにはもう、記憶を奪われても身体が覚えている

次元まで、口唇奉仕の喜びは浸透していた。

「よしよし、あー、気持ちいいぞユリーシャ。まったく、たったひと月で上達したな」

「っ……。う、うるさいわあ。早くすませたいだけよ」

「ククク、すっかりわし好みの吸いっぶりだ」

必死で体裁と取り繕いながらも、時間をかけて丁寧に野太い茎を唾液で満たし、それから裏筋にそって、ぬるーっ、ぬるーっ舌を上下させ始めた。

たちまちおびただし量の先走りがあふれて、特有のエグみが漂ってくる。

「あふ、……ンんふ♡ はふうん♡」

精液混じりのエキスを飲まされると、化学反応でも起こしたように、身体中がジンジンと熱を放った。

幼くされたあの日、元に戻るときに男の体液を栄養に使わされた後遺症だろうか。最近ではとくにこの悪辣司祭の精液にのみ反応して、全身の細胞が疼きを起すのだった。

味わいだけで酩酊に陥ったユリーシャは、発情期の猫さながらのネチツこさでヌルつきを舐り取っては、悩ましい喘ぎを深める。野太い竿肉をキュツキュツとあやし、片手ではそつと底部から巨大な玉袋を揉んだ。

「いい子だ。そう、もつと心を込めて吸るのだぞ。……おっほ、これこれ。といってそんなにガツつくでないわ。はしたない」

魔女の熱心な奴隷奉仕に、グストーはふんぞり返って目じりを細めている。

一ヶ月前までは奉仕どころか強要すれば嘔み切られるくらい腕白だった少女が。いまでは舌も、頬も、歯でさえ快楽器官にして尽くしてくれるのだから、これほどの贅沢はなかった。ましてユリーシャは、ただ怒張をあやしているのではなく。

「ムフ、ううん♡ ……ああああ、いやよ、どうしてわたし、こんな、こんなあ」

「なにがイヤだ。クク、初めてのころからネチツこく舌を使う女だったが、いまとなつてはもう精飲せねば口も喉も満足できなそうな吸いつきっぷりだな」

グツと雄々しく張った雁首に舌を絡めながら、床に跪いた細い身体は、もうしっとり汗を浮かせて落ち着かなそうにモジっていた。



返されたドレスをおへそに押しつけるよう、かき抱く。いま欲しいのはこんなものではなかった。自由でも、休息でもなく、

「ひどい、ひどいわあ」

ぺたんと女の子座りになった少女は、哀切な上目遣いで司祭を仰いだ。まるで敬虔な修道女が、崇拜する神に、祈りを捧げるように。

「ククク、なんだ。わしはお前の言う通りにしてやっただけだろう」

グストーは笑い、腰をそらせてぐいと男根でそんな美しい顔をつつく。少女は切なさど喜びの入り混じった倒錯の表情で、淫猥な熱源へと頬ずりを返した。

「して欲しいことがあるなら、ちゃんと言うことがあるろう？」

「……」

あまりの屈辱に眉をたわめるユリーシャ。しかし悔しさも、切なさも、顔に押しあてられるものが奪いとってしまふ。

巨大な雁、野太い茎胴、無数の血管。すべての要素が、条件反射で忘我を催すほど少女の記憶に深く根を生やしていた。

歡喜にのたうたされる記憶にかられ、後ろを向いて両手を床につける。

「生意気を言って申し訳ありませんでした……グストー様」

外に出るためのドレスは放り捨てて自分から四つんばいになり、尻をつきあげた。たったひとりで淫靡なほどグラマラスに熟れた肢体をクネクネさせる。

ここまでしても屈辱はあまり強くなく。むしろ……。

「ユリーシャはもう……、グストー様の奴隷よお」

粘着質な膻ひだをかきむしるようにして、怒張が押し入ってきた。

ユリーシャの内側はいつまで経っても初心で、あまりの巨大さに骨がきしむ。司祭はそこを熟知しているので、決して無理をせず交合を遂げていった。しっとりしたもち肌を抱きしめ、豊満なバストから深くぐびれ、トロトロの尻たぶまでを優しく撫でこする。

「ああん……♡」

濃密に収縮する粘膜だが、蜜も豊潤なため結合はスムーズだった。おかげで少女は毎回この瞬間、男の巨大さを思い知り、畏怖の念を強めることになる。

豪胆でかつ優しい挿入感、毎度ユリーシャを酔わせた。女の子が得てして母親に優しく頭を撫でてもらうより、父親に強く抱きしめてもらうのが好きなように。

「ぐふふ、相変わらず収まりのよいマンコしおって。おまけになんだこのいやらしい腰使いは。天性の淫乱なうえ、天性の娼婦なのだな」

「あつ、はんつ。そんな、娼婦だなんて」

「分かっておる。気高いユリーシャ。お前は娼婦などではなく、わし専用の奴隷だ」

「……ううう」

泣きたくなるほどの恥辱と、にもかかわらず男に所有物と見られて嬉しい自分があるこ

とに、少女は形のよい尻をクネつかせて戸惑う。

身体のほうは一足先に、受け入れたものに馴染み始めていた。小さな嗚咽が次第に深い陶酔の音色へと転化していく。

腰が一往復、一回転するたびに、様々な方向へヴァギナがめくられ。その衝撃がいちいち男の偉大さを伝えた。ユリーシャはどうにもできず掘り起こされた被虐の才に蝕まれ、ウツトリ目を細める。ペニスをくわえ込んだ腰つきが悩殺的な大胆さを見せる。

グストーは腰を激しくは動かさず、ゆっくり、ゆっくり内部をこすりあげてきた。

皮肉なことに事前の一人遊びで、よりいっそう肉交のすさまじさを思い知らされる。自分の指で確かめたヒダヒダの階層がピストン運動を受け、どれだけ嬉しそうに蠢いているか、自分で分かっってしまうのだ。

「最初に言った通りになったな。獣のように這いつくばって男とまぐわうのが、一番気に入ったようだ」

「な、なにを……」

「まだ言い訳するか？ ん？ お前はさつきから、自慰のときも、口でしたときも、おねだりのときまで。自分から進んでこのポーズを取っておるぞ」

ペニスの感触を馴染ませるようゆるゆる怒張を揺らしながら、背中に密着し、重たげに垂れて波打つ双乳を掴んだ。

「認めるがいい。わしに跪きたいのだろう？ わしを崇め、かす傳くことこそが、お前の幸せ

なのだろう？」

パンパンに張った乳首をイジりながら、耳の穴が湿るくらいの距離でささやいてくる。

（そんな、そんなこと……。……。ああでも）

感じやすい耳たぶを舐められ、キュンと別領域から子宮が疼くのを感じながら、ユリーシャは目を細める。

否定したい。そんなはずがない。

しかし覆しがたい事実が少女を攻め立てた。事実自分は、無意識のうちに男に傳くことを好んでしていた気がする。教会の信者たちが好んで神に跪きたがるように、地に頭を擦りよせてこの男を見上げることに、悦びを覚えていた気がする。現に先ほどは自分から犬のように主へ尻を捧げ、「奴隷よ」とまで告げてしまった。

（分からない、分からないわぁ……。わたし、どうして。……。んんくっ）

頭が混乱する。なにも分からなくなる。

けれどその答えは、恐ろしく身近に。それこそいま身内に埋まっているものが教えてくれることには、気づいていた。

（わたし……。もう、コレの虜なの？）

ヌルリヌルリと濃密に課せられる摩擦だけでも、指で何百回こすつても得られない悦びが生じる。

（抱きしめられると……。抱きしめていただくと。もっと熱くなっちゃうわぁ。……。だめ、

ぎゅってされるたびに、か、感じやす……く……)

加えて粘膜同士を合致させることそのものが。女として生まれ持った根源的な悦びまで掘り起こす。

収まっているだけで股関節からぐずぐずに溶けているような至福にかられた。蜜肉に、子宮に、細胞ひとつひとつにある、女性としての喜悦回路を無理やり動かす魔肉。

自分の心と身体は、もうずいぶん前からこれに屈服していて。だからこそ無意識のうちに跪いてしまうのではないか。

そう。グストーが見抜いた通り。

処女を奪われたときから、これに屈服していたのではないか。

「はあああああああああああ♡」

ずぶずぶ送られる反復と、被虐の倒錯とに挟まれて、頭が痺れてしまったのだろう。幼女のように舌たらずな嬌声をあげるユリーシャ。

「よしよし、やつと可愛い顔を見せてくれたな」

「え……？ あっ、あ——！」

褒美をくれてやる。にんまりしながら嘯き、グストーが練達のピストンを見せていた腰を引いた。ざっくり蜜のはじけたようになってくるクレバスから抜き取る。

その驚きと、そして新たな快楽の予期に少女が身をこわばらせる。司祭の指先が、独特

のいやらしい力加減で菊蕾を揉んできたのである。

「いやらしいアナルに育ちおつて。むちつとして吸いついてきて、これだけ美しい尻の形をしておるのに、穴だけは娼婦より下品だな」

括約筋の運動周期が小刻みすぎて、常に腸液でしっとり濡れる癖のついたそこは、イジつた名残でいかにも敏感そうに指へ紅皺を絡めてくる。

前戯の必要はなかった。穴は彼女自身がよくほぐしており、男のペニスも、凶暴な雁が搾り取った彼女の汁気でとろとろに濡れているのだから。

——ぬぐり。

「うあ……っ！」

鋭敏なアヌスをこじ開けられ、少女は背筋を大きく反り返らせる。

剛柱はさらに深くへと括約筋をえぐり、ぬむ、ぬむ狭い腸腔を進み始めた。

「ひうい……っ、イ、い——。あああああ♡」

最初に驚き、おののいたものの、ふやけた肛門がピンク色の組織を現すまでめくれ返っていく過程で、ユリーシャの幼げな声は喜色にすげかわっていった。

そこはもうユリーシャ本人が、排泄のためでなく、彼のものを受け入れるための穴だと決めつけてしまった場所だ。たとえ荒々しく肛門弁の皺をえぐり広げられようと、それによつて生じるものは、快感と幸福以外になかった。

「んあああああ、司祭っ、さまっ、司祭ひやまあああ。急にっ、急にいつ」

メリメリと菊肉を割られたことで、ユリーシヤは無意識のうちに奴隷の口調になり、官能的に尻を振りたくり出す。

伸びしろがないほど限界まで広がった肉皺は、巾着袋のように強烈な食いつきを起こす。直腸は朝顔の蕾が花開くように、奥から外へ向けて波を打ち、メリこんだ凶暴なフォルム全体を舐めあげた。

（うあああああ、き、来た。司祭様の、司祭……さまのが、ああああつ）

恥ずかしいことに、そちらを貫かれた途端、頭が真っ白になってしまう。あまりの快感に、いま自分を埋め尽くしてくれる形状以外のすべてが脳裏から消える。

卵から脱したあとも『他者』を喜ぶ癖は、心に染みついているし、まして生来そちらが感じやすいという少女の体質が、わずかな調教を生涯抜けないほどの楔に作り変えていた。迎え入れた途端に直腸は、外側から手で掴みしごきあげているかのような蠢動を起こす。すると下痢でも起こしているように肛肉の浅瀬が過敏になって、茸形のフォルムをより鋭敏に感じ取ってしまう。

「何度味わつてもよい尻だ。とろとろによく練れておる」

腰を引いて浅瀬をこりこり雁首でこすつたり。深くまでついてS状結腸をコネくりまわしたり。容赦なく弱点孔を責めるグストー。

「ううんっ、あう、はううう。らめっ、らめええ。お尻、とける、溶けるのお」

「ククク、本当にわしのチンポがお気に入りだな。可憐な形をしておるくせに、こんなに

も巻きついてきおって」

真ん中でピンク色の粘膜をむちりハミ出させた真つ白な尻たぶは、バックからの突きにあわせて恥も外聞もなく右へ左へよじれている。腰が細いぶん惱殺的な光景だった。

ぴったり合致して男に尽くしたのに、急に捨てられた膣粘膜まで、喜悅の余波で淫靡にウネっている。清楚な白弁がひし形に口を開いて、巨根にめくられ、たるんでしまった粘膜が、ぼとぼと蜜を滴らせた。

「あふつ、ふあふいいい。グストー様、ああグストー様あ、だめえ」

「んん？　なんだ、もうイッてしまうのか。相変わらずこらえしようがない」

「うふん、ああん、ごめんなさい」

たっぷりとした双乳にも指を食い込まされており、そんな状態でぐいぐい腰を送られるのだ。滾るシャフトはどうしようもなく少女の肛粘膜を追いつめた。

「ふふふ、いい顔だぞ。だからお前を犯すのはやめられん。いいのか。ん？　いいんだろ
うユリーシャ、ちゃんと書いてみよ」

小刻みに腰を前後させて、括約筋を磨きながら、腸壁の様々な箇所をこすり、つついてくるグストー。

「ああんんお尻が気持ちいいわあ……っ！　お尻っ、お尻っ、大きなおちんちんにほじくられて、んあんっ、たまらないのおっ」

細い身体をゆさぶられて、美しい貌を被虐の陶醉にうっとりさせながら、ユリーシャは

咆哮する。

「くくつ、それに素晴らしい。もともと美味そうだったが、調教を受けてもつと卑猥な尻に育ちおつて、この魔女め」

極太に翻弄される少女の様子を楽しんでいた司祭も、興奮に酔いしれ、杭往復のピッチがあがつてきた。

ユリーシャ本人には分からないことだが、最初からトロトロと腸液の多めだったそこは、最近ではさらに名器の質を上げていた。常々肛門をムズつかせる体質になったせいだろう。直腸がとかくよく動くのだ。ペニスをいれるとネバツとした腸汁が絡んで、粘膜はより滑りやすく、吸いつきやすい。

それに奥のほうの結腸までがイジメて欲しいと降りてくるので、グストーのような巨根だと、深く埋めた亀頭部が結腸の狭さにキュウキュウ舐め絞られる。

何百という乙女を貫いたグストーでさえ唸らせる。まさに男を絞るための快楽器官だった。同時に本物の魔女という特別な女を、ここまで淫らな身体にしてやった手ごたえが男の興奮を煽る。

尻孔いじりに熱が入るのも当然のことだった。括約筋にあてた根元を支点に、上下左右様々な方向へ杭を送り、熱い亀頭で粘膜壁をこすつた。

「うあう、あつ、あお……、おおん……♡ もう、もう……」

グストーの練達な、それでいて年齢を感じさせないピストンが速まる。一突きごとに銀

色の髪をふるんふるん揺らし、ユリーシャの嗚咽は、次第に低音になっていった。

初めて犯されたときから、この孔はもう極太に犯してもらうことばかり考えている。荒々しく貫かれるうち、あまりの喜びに尻孔から身体が溶けていつている錯覚にかられ、少女は心配そうに肛皺をひくひくさせた。

「括約筋がはずんできたな。フフ、分かりやすいやつめ。イキたいのかユリーシャ、もうケツでイキたくて仕方がないんだろう」

「はっ、はい。あんンン、っはく、あう……あハあああんっ」

あられもなく泣きじゃくりながら、深く上気した顔で絶叫する少女。

「イッチャう、あああ、イクっ、イクのおっ」

ぐっと柔尻を男の腰へ打ちつけて、エクスタシーの悲鳴をあげる。

頭の中が白濁していき、羽があつたら飛んでいつてしまいそうな浮遊感に、四つんばいの肢体がウネりくるう。グローブ越しの指が床のじゅうたんに食い込む。

「ああああーっ♡ はああああああーっ♡」

光の中へ落ちていくような、肛門絶頂の奥深さに、ユリーシャの全身は妖しくわなないた。広がりきったヴァギナでは奥の淫弁がきゅっと収縮し、またも湯気を交えた熱い汁気が噴き出す。

「っ……、ぐふふふ、……っう」

肉皺がくちやくちやくと咀嚼するように男根に食いつく甘美さに、低く笑うグストー。

このときだけは主従の関係が崩れる。魔女の見せつける淫らな腰振り、ゆらぎ弾む乳房、恍惚とした魔性の美貌に、さしもの淫魔司祭も巻き込まれてしまう。

——ぶちゆるるるるるるっ！　びゆるるるるっ、びゆるるるるるるるっ！

火照りきつた直腸の奥へと、濃厚な雄汁が流れ込んだ。

「くひああああああっ、ひっ、ひん、ひんんんんんんんっ♡♡♡」

すさまじい奔流が、巨根でも届かないような腹の奥底まで這い上がってくる感触に、ユリーシャはさらに狂乱の高みへと昇りつめる。

濃ゆすぎる粘液は硬いくらいで、ぐっど腸壁が押された気がした。衝撃は絶頂しジンジン痺れる子宮へと伝播して、びゅちゃりと再度、熱い蜜を吹かせる。そして、

「……あ♡」

——ぷし……っ、ぷしやあああああ……っ。

膀胱まで絞り上げた。

女肉のもたらず甘酸っぱいそれとも、ヴァギナが醸す淫靡なそれともちがう。遊びたい盛りの幼女を連想させる特有の蒸臭が立ち込める。

「おお？　ぐふふ、またか。ユリーシャは毎回イクたび粗相をしてしまうなあ」

「いやあんだって、だつてえ……っ」

最初のころから感じすぎて尿道が緩むことはあったが、卵で失禁の味を知ってからというものは、少女には絶頂と放尿をセットにしてしまう癖がついていた。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 本体690円(税込)

全国書店で
好評発売中



「…藤田君は責任取るべき」
睦月への想いに身を焦がすマキナ
彼女は夜の教室で……!?

小説：さかき傘 / 挿絵：天海雪乃

思春期なアダム3 一人泣きの子猫

女幹部メル様の
セカイ征服計画!

小説：高岡智空 / 挿絵：鈴眼依縫



2010
8月下旬
発売予定!!

悪の秘密結社vs正義のヒーロー
イケない戦いの記録!

全国書店で
好評発売中



「当方Mドレイ希望」
魔界最強のプリンセスがドレイ志願?

小説：酒井仁 / 挿絵：にの子

不死の吸血姫がDSのご主人様を募集
しているようです

- 既刊LINEUP**
- 仙獄学園戦姫 / ノナガリ! ①～③
 - 借金お嬢クリス ①～③
 - 純爛! 帝都少女探偵団 赤い寶珠を掌て!
 - プリンセスリバーシ!! 文藝する美姫と魔姫
 - BLANGEL 輪になりて踊る愚者の夜
 - 無敵の短騎士がDMに目覚めたようです
 - ビルグリムメイデン ①～②
 - 呪詛喰らい部【カースイーター】
 - 魔海少女ルイエルル



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

ヴァルキリエ

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

mille-feuille

<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

モバイル二次元ドリーム

<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!